

不登校児の回復教育に力を注ぐ

江別市 NPO法人フリースクール「どんぐり広場」

いじめが無くならないのと同様に、何らかの心の葛藤で学校に行けなくなる不登校の子供も後を絶たない。むしろ増加傾向で、しかも低年齢化している。心の問題だけに解決はなかなか難しいが、肝心なのは周囲の大人がいち早く気づき、対処することだという。ところが小・中学生を対象とした回復、指導機関はほとんど無いのが実情。



図画の時間、立派に書けた動物の絵を自信たっぷりに頭上に掲げる児童

こんな現状を、実際に不登校高校生の教育に当たっていた男女2人の高校教諭が痛感し、「ならばその役割を自分たちが

担おう」と、結婚して教職を辞め、2人だけで、主として小・中学生の不登校児の回復教育に乗り出した。

江別市文京台に開設されたNPO法人「どんぐり広場」がそれ。開設ほぼ5年で20人以上の子供を立ち直らせており、その指導のあり方が、教育専門家や地域の人たちから高い評価を得てきている。

■ 広場開設 ユニークな学習展開

「どんぐり広場」を開いたのは、不登校や登校拒否高校生を受け入れている星槎国際高校（札幌）で、実際に不登校生の復帰指導に当たっていた一色恵太、摩弥両教諭。恵太さんは体育担当で6年、摩弥さんは家庭科を受け持って5年指導に携わったが、その間痛感したのは「不登校生の回復を図るには高校生の年齢（15～18歳）では遅すぎる。もっと前の小・中学生の時から始めなくては」の思い。

この考えで2人の意見は一致。結婚、退職して開いたのが「どんぐり広場」だ。2008年（平成20年）春のこと。場所を文京台に選んだのは、すぐ近くに授業には欠かせない豊かな自然—野幌原始林が

あるほか、学校教育の専門機関・道立教育研究所があって何かの折に相談に乗ってもらえ、さらに体育館が併設してあり、体育実習に貸してもらえるとという“地の利”から。「どんぐり」の名前は、かわいらしくて親しみがあり、心にわだかまりを持つ子らが、いつでも気軽に楽しく出入りできるようにという、夫妻の配慮から。

そんな訳で「広場」には、学校や塾のような校舎はなく、NPO法人の事務所を兼ねる自宅の座敷が教室といえ教室。

勉強の仕方も一風変わっている。ある日の恵太先生の基礎学習の時間。

先生「水は飲んだり手を洗ったりするね。ほかにどんな使われ方があるかな？」

児童「お風呂や洗い物に」

先生「うん、そうだね。ほかに？」

児童「う〜ん、トイレとか…」

ぐっとつまったところで先生は、アフリカの草原の水辺でたくさんの動物が集まって水を飲んでいる絵を広げ、「動物は水無しでは生きてゆけないんだ。人間も同じだよ」と説明。次にゴツゴツした月の表面の写真を取り出し「ほら、ここには動物や植物が見当たらないね。水が無いからだよ」と進む。そのやり取りは先生対生徒ではなく、ほとんど親子の語りといったおもむき。

この間先生の眼差しは常に子供に注がれ、理解していないなと感じられたら、さらに噛み砕いてもう一度。時には絵を

広げたり、休みを入れたり、ゆっくり焦らずに。そこには「教える」ではなくて「伝える」、「指導する」ではなくて「うながす」という「広場」の教育モットーが貫かれている。

勉強に飽きたな、という様子が見えたらすぐ中止し、連れだって近くの野幌自然公園へ。ここでは自然に接しながら草木や昆虫、動物の観察を行い、オブジェなどの制作のための落ち葉や小枝拾い。一連の流れは一応、国語の「テーマ学習」としているが、この展開で国語だけでなく理科、社会、算数、体育など、興味を持たせながら多科目学習に広がっていていることがうかがわれる。



「とったぞー」。スポーツ学習で、難しい球を見事にキャッチして大喜びのぼくちゃん

不登校の原因は、いじめや友達との不仲、家庭環境など子供一人ひとりで異なるので、みんなそろっての集団学習はできない。だから学習は大抵、先生一人に子供一人のマンツーマン。内容も子供の力に応じて科目ごとに、夫妻それぞれ工夫して独自に用意する。

雨や風で外に出られない時や午後は、妻の摩弥先生の出番。料理や菓子作りと一緒に体験、保管しておいた落ち葉や小枝でリースや壁掛けなどの図工に挑戦。台所に立って「おはぎ」や「ケーキ」づくり、時には「うどん打ち」に興ずる姿は、本当の母娘と一緒に料理づくりを楽しんでいるよう。そこには、生活への興味・関心を広げながら、五感で感じ、学ぶ感性を育むという、「広場」の活動の狙いが余すところなくちりばめられている。

■指導は夫妻2人、時には実子や犬も

ちなみにこれらの回復、指導に当たる先生スタッフは一色夫妻の2人だけ。自然探訪や料理実習などの科目によっては、夫妻の4歳と1歳の子供と、7歳の犬・ラブラドルレトリバー1匹も参加。たまに、言葉の専門家として、星槎国際高校校長で、道立特殊教育センター所長でもある跡部敏之さんが加わることもある。

「とにかく居心地よく、楽しく過ごしてもらうのが一番です。そのために声かけや接する距離の取り方、話す内容をよく考え、少しずつ環境を整えて自発の心の成長を促しています。ここで体験を積み重ねてゆくと表情が明るくなり、自信を取り戻し、自分を開いてゆくのがよくわかります。そうになると少人数での学習が物足りなくなり、自然にもっと多くの友と、学校で交わりたくなりますよ」と語る夫妻の言葉は自信に満ちている。

■体験学習通じ見聞を広める

別の日、スポーツクラスに通う男子中学生の学習を覗くとー。座敷教室で夫妻と少し談笑したあと恵太先生と2人だけで教育研究所の体育館へ。入念に準備運動とランニングをしたあとフリスビー（円盤状遊具）の投げ合い。この間「おっ、体が軟らかいね」、「うまい、うまいその調子」などと心を奮い立たせるような声かけを欠かさず、座学の時と同様、まるで親子が遊び、たわむれている雰囲気。続いてバドミントン。ここでも「うまいなあー。先生も負けそう」、「もう一丁。そうだ」の褒め声が響く。約2時間半のレッスンで、2人とも汗びっしょり。見ると、「広場」に来たとき、心なし元気がなく声も小さかった生徒の表情は、活き活きと明るく、声もびんびん響いてまるで別人のよう。



見事なお菓子の出来栄に、先生も生徒も満足の笑顔

■ 遠征して農業体験、工場見学も

このほか「広場」では、経験、体験を広めるために石狩、空知の農家や木工場、食品工場などの物づくり現場へ年間数回、みんなで出かけ、実習したり見学して社会体験を積ませている。また、北海道フリースクールネットワークにも加わって、不登校児の対応に関する情報交換や、集団研修会、施設見学会などにも参加して見聞を広げている。

「広場」に通う費用は、受ける学習が午前か午後か、両方か、週何回かで決まるが、週1回午前クラスで月7千円から週4回午後クラスの月3万4千円まで。現在通う児童、生徒は小・中学生合わせて6人。



「私だってできるわよ」…。お母さん先生の指導で新しい料理づくりに挑戦する女子生徒そこには母娘にも似た交流が生まれている

一方運営の方は、通う子どもたちからの学習料と道共同募金会、コープ札幌社会福祉基金、道新社会福祉振興基金からの助成金でまかなっているが、夫妻2人

が教師をしていた時の収入に比べれば大幅な減収。2010年（平成22年）にNPO法人に認証されたので、広報や賛助金の面で少し楽になったが、生活はいぜんぎりぎり。講演や原稿を書く副業をしてしのいでいるものの、台所が苦しいことに変わりない。

それでも夫妻は「うちで学ぶことで元気になってゆく姿を見るのはとっても嬉しい。親御さんの表情も喜びに変わりますしね。その達成感は何物にも替えられない感動です。将来はスタッフをもう少し増やして、幼くして人生に挫折しかかった子どもたちを1人でも多く救ってあげれば本望です」と決意を語っている。

■ 連絡先

〒069-0835 江別市文京台南町 32-4
NPO法人
フリースクール「どんぐり」広場

代表：理事長 一色 恵太
事務局長 一色 摩弥

TEL 011-777-8543

E-mail : dongurihiroba@live.jp

URL : [http://www8.plala.or.jp/](http://www8.plala.or.jp/dongurihiroba/)

[dongurihiroba/](http://www8.plala.or.jp/dongurihiroba/)